

武蔵野日曜集会

キリストの赦し

――ヨハネ伝第7章45節～8章11節――

1994年11月20日

小池辰雄

天来の権威 偽善なる学者、パリサイ人 イエス地に物書き給う われも汝を罪せじ 宗教の世界が一切の土台 深い赦しと愛の言葉 ふたたび罪を犯すな

【ヨハネ7・45～8・11】

⁴⁵而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に帰りたれば、彼ら問う『なに故かれを曳き来らぬか』⁴⁶下役ども答う『この人の語るごとく語りし人は未だなし』⁴⁷パリサイ人等これに答う『なんじらも惑わされしか、⁴⁸司たち又はパリサイ人のうちに一人だに彼を信ぜし者ありや、⁴⁹律法を知らぬこの群衆は詛われたる者なり』⁵⁰彼等のうちの一人にて曩にイエスの許に來りしニコデモ言う、⁵¹『われらの律法は先その人に聴き、その為すところを知るにあらずば、審く事をせんや』⁵²かれら答えて言う『なんじもガリラヤより出でしか、查べ見よ、預言者はガリラヤより起こる事なし』⁵³斯ておのおの己が家に帰れり。

¹イエス、オリブ山にゆき給う。²夜明ごろ、また宮に入りしに、民みな御許に來りたれば、坐して教え給う。³爰に学者・パリサイ人ら、姦淫のとき捕えられたる女を連れきたり、真中に立ててイエスに言う、⁴『師よ、この女は姦淫のおり、そのまま捕えられたるなり。』⁵モーセは律法に斯る者を石にて撃つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言うか』⁶斯く云えるはイエスを試みて訴うる種を得んとてなり。イエス身を屈め、指にて地に物書き給う。⁷かれらの問いて止まざれば、イエス身を起こして『なんじらの中、罪なき者まらず石を擲て』⁸と言ひ、⁹また身を屈めて地に物書きたまう。彼等これを聞きて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人ひとりいでゆき、唯イエスと中に立てる女とのみ遺れり。¹⁰イエス身を起こして、女のほかに誰も居らぬを見て言ひ給う『おんなよ、汝を訴えたる者どもは何処におるぞ、汝を罪する者なきか』¹¹女いう『主よ、誰もなし』イエス言ひ給う『われも汝を罪せじ、往け、この後ふたたび罪を犯すな』



●天来の権威

45 而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に帰りたれば、彼ら問う『なに故かれを曳き来らぬか』⁴⁶ 下役ども答う『この人の語るごとく語りし人は未だなし』

「未だなし」とは非常に著しい言葉です。未だなく、それから後もない。イエス・キリストは特別な人です。「祭司長・パリサイ人ら」というのは皆、キリストが分からないご連中です。「パリサイ人」というのは、自分たちはモーセの律法を詳しく知っていて、また実践していると自ら驕おごっているような自己義認しているご連中です。パリサイ気質というのは、そういう自己義認の気持をいう。

「かれ」とはキリストのことです。我々もキリストのことを「彼」と尊敬をもって言うことができます。キリストはとにかく次元が違う。旧約の預言者といえどもキリストには次元がまたひとつ違う。キリストの語るのは彼自身も、

「自分は自分で語っているのではない。父が言うごとく言わせられているだけだ」

と言われた。だから、キリストの語る言葉は神の言葉であり、天来の響きをもっているわけです。我々は聖書を読むときに、文字の背後にキリストの響きを聞かなくてはいいかん。そうでないと、本当は読んでいることにならない。天来の権威がある。

我々は小学校の時に、先生の仰ることは絶対であって非常に権威を感じていた。そういう天来の権威というものを持った教育者というものは今は非常に少ない。小学校の先生はそういうった権威をもたなければダメです。要するに結局、教育の根底には宗教心がなければ本当の教育はできない。そういう意味で――キリスト道であろうと仏道であろうといひ――正しい意味における宗教心が大事です。

本当は人間は本来宗教人なんです。

「山川草木悉く仏性あり」^{ぶつしょう}

というでしょ。いわんや、人間は神・仏の性を本来はいただいているわけです。それがパラダイス・ロストでどこかへいつてしまったけれども、本来はそうなんだ。人間は神の相すがたに即して造られた。あの「似姿」という字は姿に即する、という言葉なんです。相というのは内的なすがたです。精神、心、魂の相です。

キリストは天来の権威をもつて語られた。小学校の先生方が権威をもつて我々を導いた。ドイツのビスマルクが何を感じたかとか聞かれたら、

「自分は小学校の先生に感謝する」

と言った。それだけドイツの小学校の先生はしっかりした魂の教育をしていたとみえる。今はどうか知りませんが。小学校の教育が基礎ですから、小学校の先生というのは非常に大事なわけです。小学校の時に本当の教育をしてないと、もう後はダメです。



どんな文学や哲学の本でも聖書の言葉にはかなわない。これは天来の権威があるから。天来の権威にのつかった文学や哲学ならいい。ダンテとかゲーテとか、ユゴーの『レ・ミゼラブル』とか、ああいう第一流の詩人文人はやはりその世界をちゃんと身につけてます。とにかく第一流のものの他は読む必要がない。第一流のものを熟読する。第一流の詩を読むことです。

聖書の文字のごとき文字はない。ただし、聖書も文字そのものにこだわったらダメです。その奥の響きの世界です。だから、本当は音楽の世界なんだ。ベートーベンの音楽が素晴らしいのは、あの響きが言葉以上なんだ。詩篇に、

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼はその手のわざをしめす。この日
ことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。語らずいわずその
声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにま
でおよぶ。」（詩篇19・1～4）

とある。そのようなわけです。

●偽善なる学者、パリサイ人

47 パリサイ人等これに答う『なんじらも惑わされしか、
「惑わされしか」なんて冗談じゃない。キリストに捕まったのは「惑わされたか」なんて、
パリサイの奴はそういうことを言う。天来の響きをもった非常に内容の深いキリストの言
葉のことを

「惑わされしか」

なんて言っているのだから、とんでもない。パリサイは正に、

「偽善なるかな学者、パリサイ人よ」

とキリストが言われたのは、そういうわけです。本当の学者というものは、絶学してその
奥に宗教の世界をもっていないと、本当の学にならない。ダンテとかゲーテとかいう大詩
人はそういうことをちゃんと知っているわけです。

48 司^{つかさ}たち又はパリサイ人のうちに一人だに彼を信ぜし者ありや、
「ないだろう」と。それはないのが当然なんだ。キリストのことを偽物^{にせもの}と思っ
ているんだ、
冗談じゃない。

49 律法を知らぬこの群衆は詛^{のろ}われたる者なり』

パリサイというのはそういうことを言う。律法を知って律法の通りに外側から守っている
者は良いと思っているのがパリサイですから。そんなモーセの律法なんか知らなくていい。
キリストの言葉を受けとっていれば、律法以上の世界ですから。

「この群衆は詛^{のろ}われたる者なり」

なんて、冗談じゃない。これは旧約的なユダヤ教の判断だから、こういうことを言っている。



「詛われている」のは自分たちなんだ。

「だから、お前たちはその轍をふむな」
なんてなわけだ。

50 彼等のうちの一人にて曩にイエスの許に來りしニコデモ言う、

この「ニコデモ」は素晴らしい。ニコデモは最初のクリスチャンだ。これはサンヘドリンの議員の一人です。ところが、権威あるイエスの言葉に彼は本当に聞き入った。

51 『われらの律法は先その人に聴き、その為すところを知るにあらずば、審く事をせんや』

「キリストに本当に聞いてないではないか。それで審きができるか。キリストの恵みも審判も本もので、モーセの十誡と旧約の預言者よりかもうひとつ次元が違うんだ」

と。このニコデモというのは偉い。一番先にキリストを従順に受けとった。

「イエスを本当に受けとつてないではないか。とんでもない。偽物ではないんだ、これは本ものなんだ」

いうことを言っている。

52 かれら答えて言う『なんじもガリラヤより出でしか、查べ見よ、預言者はガリラヤより起こる事なし』

ニコデモがそういうことを言うものだから、彼らはむしろびつくりしてしまった。彼らは因習的な判断でものを言っている。

53 斯ておのおの己が家に帰れり。

● イエス地に物書き給う

今度はヨハネ伝8章に入ります。

1 イエス、オリブ山にゆき給う。

「オリブ山」はエルサレムの東の方にあります。あそこから見えます。ちよつと小高い所です。

2 夜明ごろ、また宮に入りしに、民みな御許に來りたれば、坐して教え給う。
特に「坐して教え給う」というのがおもしろい。坐ってお話になった。

3 爰に学者・パリサイ人ら、姦淫のとき捕えられたる女を連れきたり、真中に立ててイエスに言う、⁴ 『師よ、この女は姦淫のおり、そのまま捕えられたるなり。』⁵ モーセは律法に斯る者を右にて撃つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言うか』

キリストを何か困らせようと思って、こんな皮肉な変な質問をした。「モーセは……」というのは、申命記22章に、

「処女なる婦人すでに夫に適の約をなせる後、ある男これに邑の内にて遇いて

これを犯さば、汝らその二人を邑の門に曳きいだし石をもてこれを撃ちころすべし。是その女は邑の内にありながら叫ぶことをせざるに因り、またその男はその隣の妻を辱^{はずか}しめたるに因りてなり。汝かく悪事を汝らの中より除くべし。」(申命記22・23、24)

とある。この言葉です。

6 斯く云えるはイエスを試みて訴うる種を得んとてなり。

律法に違反したら訴えようとするような悪知恵を、キリストはちゃんと見抜いていらつしやるわけです。

イエス身を屈^{かが}め、指にて地に物書き給う。

これはおもしろいね。

7 かれらの問いて止まざれば、イエス身を起こして『なんじらの中、罪なき者まづ石を擲^{なげ}て』と言い、

多分、こういう文句をお書きになったのでしょね。お前たちの中で罪なき者が、石を撃とうと思うなら撃つてみると。

8 また身を屈めて地に物書きたもう。彼等これを聞きて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人ひとりいでゆき、唯イエスと中に立てる女とのみ遺れり。

キリストは心の中をちゃんと見ているから、みな逃げて行つた。もし偽りを言えば、キリストにやつつけられるしね。

●われも汝を罪せじ

10 イエス身を起こして、女のほかに誰も居らぬを見て言い給う『おんなよ、汝を訴えたる者どもは何処におるぞ、汝を罪する者なきか』¹¹ 女いう『主よ、誰もなし』イエス言い給う『われも汝を罪せじ、往け、この後ふたたび罪を犯すな』

「われも汝を罪せじ」

この言葉は、何か小言を言ったり審きを言ったりする言葉よりも、もつと深い。本当の赦しと本当の愛の言葉です。深い愛をもつた赦しの言葉です。この言葉には参るです。我々は躓いたり転んだりします。しかし、キリストは「われも汝を罪せじ」と言われる。そこで我々は悔い改める、方向転換する。

「われも汝を罪せじ」

という言葉の一番深い実証は何かというと、十字架なんです。キリストはやがて十字架で全部、罪は引き受けてしまう。キリストは何のために十字架に架かったかというと、一切の罪を引き受けて取り消してしまうためです。これがキリストの十字架ですから。十字架



の贖いというのは、イザヤ書53章の預言を彼は成就したわけです。

「彼はわれらの愆のために傷つけられ、われらの不義のために碎かれ、

これは十字架で碎かれた。

みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし痕によりてわれ

らは癒されたり。」(イザヤ53・5)

という、このイザヤ書53章をキリストの十字架が完全に成就した。

キリストは非常にイザヤ書を愛読された。暗記するくらい知っていらつしやった。旧約の中心は何といつてもイザヤ書です。詩篇ではない。ルッターは詩篇を非常に評価したけれども、実はイザヤ書の方が素晴らしい。預言書というのは上からの言葉ですから。詩篇というのは下からの願いや讃美です。本当の審判、本当の恵みは上からきている。こちらからお願いによつてするのではない。

イエス言い給う『われも汝を罪せじ、往け、この後ふたたび罪を犯すな』

と。人間だから、また罪を犯したかも知れません。けれども、それは全部、

「七度を七十倍して」

キリストは赦す。

人を審かないで、自分でその審きを全部受けとつてしまふ。これが十字架ですから。十字架というのは決定的な、徹底的な赦しなんです。過去・現在・未来の私の罪は全部赦した。ということは、私自身が罪びとなんだ。罪びとを贖ってしまったのが十字架だから。個々の罪過なんていうものは問題ではない。そんなものはキリストは問題にしていない。

「お前は贖いとおつたぞ、心配するな」

というわけです。そういう深い愛をもつた赦しの言葉が我々を本当に活かす。そのような権威と深い愛というものはキリストの他は誰も持てない。

●宗教の世界が一切の土台

どんな哲学も文学もダメです。しかし、そういうところに乗つかつてゐる文学は素晴らしい。私は『レ・ミゼラブル』を読んで、さすがはユゴーというのは素晴らしいなあ、と、本当に感嘆した。感激の涙です。第一流の文学はそういう世界に根ざしている。でなければ、第一流には、あるいは超一流にはなれない。ダンテの『神曲』だとか、日本にはそういう第一流なものが出てこない。漱石でも何でもダメです。そういう深みを残念ながら持っていない。宗教の世界を何か特別な世界だと思つてゐる。そうではない。

「宗教の世界が一切の土台」

ということをも今の教育者は本当に知つてゐないものだから、聖書を棚上げにしてしまつてさっぱり読まない。

皆さん、聖書は部分的に破りとしてポケットにいれて、電車の中でもどこでも読んで身



につけてください。聖書くらい、深い意味でもしろい本はない。どんな本も中身は聖書にはかなわない。聖書に本当に乗っかっている文学はいい。どうして日本には第一流のものが出てこないかというと、結局、聖書という本当の根源を持たないからです。本当の響きを持たない。漱石さんのものはおもしろいよ、しかし、おもしろいだけではダメなんだ、魂がゆり動かされないから。藤村でも、啄木の詩でもそうです。

何か聖書をもったいぶっていたらダメだ。聖書というものはもったいぶる必要はない。「聖書」という言葉が躓きになるんだね、「聖なる書」なんていうものだから。私は

「聖書は最大のドラマである」

と書いた。教えではない、ドラマだ。「聖書の教え」という言葉が躓きになる。教えというのはダメです。私もあなた方にひとつも教えていない。私は告白しているだけです。教える言葉は人を動かさない。魂の奥底から告白している言葉が共感を与える。いわゆるお説教ではダメなんだ。

●深い赦しと愛の言葉

「汝のうち罪なき者がまず石を撃て」

……

「お前を罪する者はいないか」

「誰もいません」

「私もお前を罪しない」

これが本当に深い赦しと愛の言葉です。この言葉で参るんです。これに参らなかつたら、その人は本当はその言葉を受けとっていないことになる。キリストに平伏して降参すると、キリストの世界に入る。「分かる、分からない」の世界ではない。

「聖書が分かりました」

なんていうのはダメだ。

「聖書には参りました、降参しました」

というと、その世界に入る。かぶとをぬがなければダメなんだ。かぶとを脱ぐまではダメだ。

（「美空ひばり」の詩（後の詩歌集『霊界の星々』に掲載）を朗読。「嗚呼、玉杯に」の寮歌独唱）

「われも汝を罪せじ」

ということを決定的に受けとったのが十字架上のキリストです。我々の罪を全部引き受けて、十字架で贖罪の死を遂げられた。「われも汝を罪せじ」というこの言葉は、十字架でもってはっきりと実現した。

過去・現在・未来の我々一人びとりは全部、十字架のキリストに赦されている。そのキリストの赦しと愛の力に押し出されて、我々は本当に生きられる、力を得る。贖罪の十字架と復活のキリストが私たちを赦しかつ生命を与える。これは無条件の恵みです。そうし



たらもう、すること為すことが楽しくてしょうがないし、力が来てしょうがない。何もつぶやくことはない。

そういう凄い世界を普通の方々は知らないわけで、本当にお気の毒だ。「信仰」とか何かを言っているのではない。本当の恵みの力の世界は、このキリストが与えているということとを、何とかして普通の人に知らせたいわけです。だから、それを一対一でもって直々に語るのがあなた方の本当の伝道なんです。キリストを紹介しないと勿体ない。

「こちら側の信仰がどうだなんて、そんなことを問題にしているのではない。信仰なんかありませんで結構です。キリストの愛と赦しに圧倒されて生きているだけです」

と言つてやる。それでいいんだ。

「どういふことですか？」

と聞かれたら話してやる、

「上からの恵みに圧倒されて生きています」

と。若い人たちにこういう消息を知らせなければ正直、勿体ない。どうぞ、大いにやってくださいよ。

●ふたたび罪を犯すな

「女いう『主よ、誰もなし』イエス言い給う『われも汝を罪せじ、往け、この後ふたたび罪を犯すな』」

「往け、この後ふたたび罪を犯すな」こんな言葉は守れない。また躓いたり転んだりします。

「けれども、どんなに躓いても転んでも、私はもうお前を罪しないぞ」

と。これが本当の絶対恩寵の力強い言葉なんです。

「そうか、また罪を犯してはいけないのか」

なんて考える必要はひとつもない。キリストの無条件の恩寵を、無条件に受けとって進んでいく。それだけのほなしです。

「現実がどうだこうだ」

なんてはどうでもいい。そうしたら、ありがたくてしょうがない、力が来てしょうがない。聖書はそういう捕まえ方をしてくださいよ。新約聖書は特にそういうキリスト中心の書ですから。

パウロが全くそのキリストの愛に圧倒された。ローマ書8章のところでパウロは感嘆している。

「然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、此の他の造られたるものも、我



らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざること
を。」(ロマ8・37～39)

「そんな相対的なものはどんなに良さそうでも、このキリストの愛はそれとはケタ
が違うんだ、次元が違うんだ」

と、パウロは言っているわけです。これは素晴らしい言葉です。

「キリスト・イエスにある神の愛から我らを離させるものはいかなるものもない。
心配するな」

と。パウロは9章で、

「もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから^{のろ}まれてキリストに棄
てらるるも亦^{また}ねがう所なり。」(ロマ9・3)

と叫んでいる。

「それくらい私はキリストの愛をお前たちに伝えたいんだ」

と。パウロは、反キリストの男がひっくり返されて、キリストの一番凄い弟子になってし
まった。こんな鮮やかな転向はない。パウロというのは選びの器です。ダマスコ途上でひ
っくり返された。そういう烈々たる福音の世界ですから。

どうぞ、皆さんもそうやって伝えてください。

